

## すぎ やま 杉山遺跡

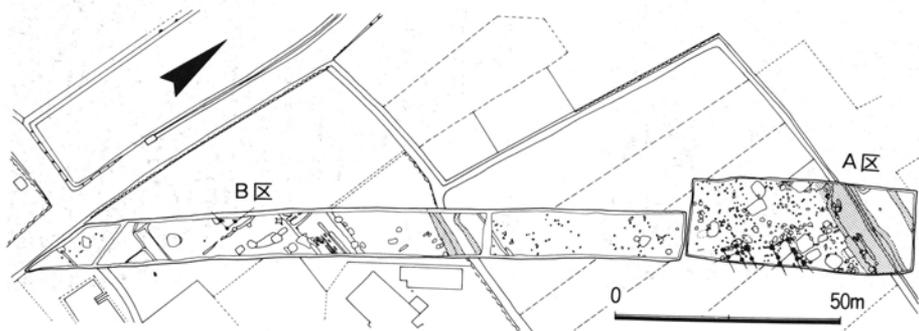
**位置・経過：**杉山遺跡は、新城市杉山字杉山地内を中心とする一帯に所在し、標高は56m前後をはかる。この地は豊川右岸に展開する河岸段丘の中位面にあたる。遺跡はこの段丘端から幾分内側に入ったところに位置する。今回の調査は、国道151号線バイパス建設に伴う事前調査として実施したものである。調査面積は2300m<sup>2</sup>。

**遺構：**調査地点における遺跡の基本層序は、耕作土→黒ボク層→黄褐色土（基盤）で、遺構はいずれも耕作土直下で検出された。主な遺構としては、東西乃至南北方向の溝22条、掘立柱建物址6、その他土坑多数である。これらの遺構の時期区分についてはなお検討を要すが、総じて13～16世紀代に比定されるものである。その性格についてもなお判然としない点もみられるが、調査区の北半部においては、溝により画された「屋敷地」を想定し得る。そしてその場合、北辺の溝の東延長上が杉山端城の南辺の堀にあたること（文献上



では16世紀後半に存在したとされるが、表採遺物には、13～16世紀代のものがみられる）及び年代的に一致をみることから、これらの遺構は、城一あるいは居館と考えるべきか一と何らかの関連をもつものと推察される。

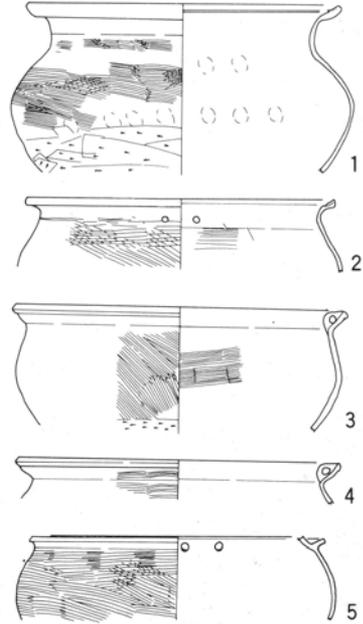
第1図 杉山遺跡位置図（A・杉山遺跡、B・端城、C・道目記城）



第2図 遺構配置図

**遺物：**今回の調査区で出土した主な遺物には、土器・陶磁器類、金属製品、石製品がみられる。その大半を占める土器・陶磁器類としては、「中世陶器」、土師質土器及び若干数の須恵器、灰釉陶器(瓷器)、中国磁器がみられる。量的には土師質土器類(土鍋、羽釜、小皿)が多くみられ、従来、その様相が不明であった当該地の土師質土器の実体を究明する上で貴重な資料が得られたものとする。殊に、所謂「伊勢型」鍋と称されるもの(第3図1・2)は、尾張平野部出土のものと同様であり(例えば阿弥陀寺遺跡一本書P56)今後、尾張～三河部にかけての当該期の編年資料として注目されよう。中世陶器には、渥美窯、常滑窯、瀬戸・美濃窯の各窯産のものがみられる。金属製品としては、銅銭、鉄釘、鉄鏃、刀子が、石製品では石臼がみられた。以上の遺物の編年観については、若干数の須恵器、灰釉陶器(瓷器)を除き、13～16世紀代に比定されるものである。

以上、今回の調査を通じて、新城地方における当該期の屋敷地の一様相について提示し得たものとする。  
(浅井和宏)



第3図 出土遺物(1/6)  
(1:SK368、2~4:SK263、5:SD01)



遺構全景(左・A区、右・B区)